平成７年２月１４日発行

# 鵠沼

久　久　比　奴　末

はまゆう　と　櫻貝　と
海光る　わが　故里

## 第　７１　号

内容　鵠生園日記　田中　まさ子
湘南の海と相模湾の大気汚染　吉田　興一

# 鵠沼を語る会

久久比奴末とは、「新編相模国風土記稿」（天保１２年・1841）で、”くくいぬま”と読みます。これが鵠沼の地名の起りです。　〔藤沢市史資料・第29集より〕

# 鵠生園日記（続・1994・平成6年1～11月）

田中まさ子

平成六年一月

鵠沼の海はやわらかな潮騒をよせてくる。鵠生園も平和に、平成六年の初春を迎えた。新しい歳を祝って、お琴の畑中先生が六段の曲を弾いてくださった。その次のデーサービスの日には「書き初め」をして、又初釜の日は職員のお手まえで、一同およばれして、静かな茶事に一日和んだり、「花びら餅」を頂いて、ああ嬉しいと長い人生を考えた。

この園の歴史は古いので、色々な方面の方が参観に見える。おせっかいながら、いつも私は言ってしまう。「どうか福祉とか又奉仕とか言わずに、ごく自然体で、弱い立場の人をいたわり助けてあげるということを、幼い時から身につけて下さい。子や孫の教育に一番大切なことですから」と言う。肩肘張らずに、幼い時にしっかり教えれば、身に付いて座視しないはずだから。この園で毎日働いて下さる方々は、実によく学んでくださる。日常のことを、さりげなく親切に明るく、いつも私達は感謝している。（これは決してヨイショではないのですよ）

さて価値観の差といわれて久しいが、一人の老は語る。まぁ、聞いてください。言っても始まらないことだけれど、その差は大きく、驚いてばかりで考え込んでしまう。私達が子供を持った喜びは、ただ、有り難さに尽きる思いで、その子を幸せにしてやることばかり考え、子供が成長したら頼ろうなどとは考えていない。その子のため家中の円満健康に明け暮れ、ただそれだけで毎日が幸福だった。だが、今の女性は違う。子供や男に頼ってばかりではなく、自分自身が立派に社会人として生きてゆけるようになった。これは大変結構なことではあるが、親離れが誠ににあっさりと早いので、悲しいよねと言う。本当だ。よく解って共に悲しい。結局老いを支えるものは老い同志であることをしみじみ思った。

二月

二月になって風邪引きが多くなった。私も休んでいるまに、伊藤清さんの死を後で聞いた。一度見舞いに行きたかった。一月二十六日と知人が知らせてくれた。あんなに気丈に色々な病気と戦いながら明るく美しく耐えていたのに。涙がやたらと出る。日本橋の老舗の娘である清さんは、古い東京の話をして私は親しかった。よき時代の人はみな去った。もう歌舞伎の話をし、長唄や清元の唄も聞けない。十五世羽左衛門や、そのあとの役者の話はいつも「けいちゃん」ファンで、この福助も戦時中、鎌倉

で寂しく死んで行っつたものだった。別宅にいる気楽な身分の老舗の娘さん達に、江ノ電の鵠沼のホームでよく会った。買物に芝居に仲間は四五人、清さんが逝って、もう、私にはその頃の日本橋を語る人はいなくなった。芝居、おさらい会など楽しい時と、戦争が苦しい時と、思いでは尽きない。

三月

ひな祭りも過ぎたのに真冬の寒さ。こぶしも桜もつぼみは固い。この冷えた風の中さむざむ身にこたえることばかり。どうしたことだろう。農作物不況、米騒動、やみ米の値、パニックなんて文字がテレビ、新聞で報じられる。米屋に行列しても買えない、高いなど不満の声が溢れる。

細川（首相）さん中国に行く。中国首脳に北朝鮮の核疑惑懸念伝達。北朝鮮へ働きかけ要請するとある。

ときまさに桃の花ざかり。鵠沼の桃は、まだ我が家に残り、春を待って明るい。細川首相の施政方針演説を一生懸命に聞く。しっかりしてね。日本は平和をこそ大切にしてね。皆、思っている。

四月

残る寒さの中に、まず、こぶし、すみれ、たんぽぽと鵠沼の春は早い。海からの風も気持よい。新しい家が、どこまでも続き、つくし、ふき、よもぎを摘んだ原っぱ、もう何処にも見当たらないが、道路の片隅に、まあ、こんなところにと顔を出す。野の草の懐かしさ。園のお友達中村さんが、ふきを採って来て、煮なさいと沢山持ってきて下さった。有り難い。まだ、蕗が出る空き地があったのだ。やっと今年の冬を越せて。園に集まって笑顔を見せる人々を見てホッとする。そして、お釈迦さまの誕生日の花まつりをする。

四月十日

太平洋戦争のテレビを見る。戦艦大和が沈んで五十年経ったという。もう、見たくないと思う。ただ、今の平和が有りがたく思うのみで、話には出なくなった。晩春のむなしい気分の中に、細川連立内閣、維持が分裂かと細川さん困っている。さあ、大変なことになりそう。ＮＡＴＯがボスニア空襲、ルワンダに死者が一万人という。あれこれテレビは伝えるが、その中でうぐいすが、今年も鵠沼の家々へきて、鳴いてくれる。去年きたなじみの鳥だろうか。海からくる風も和やかく吹き込み、本当の春になった。園の車で、歩けない人は車椅子で、春の散策が行われた。天気はよし、桜は

少し散り始めたが、藤沢は広いなあ、と久し振りの外出を喜んだ。ことに新林公園の新緑の山の下でお弁当を開いた。なんだか故里の風を聞くようで懐かしさが一杯だった。小池邸に入り、古い民家のよさは、しばし現実を忘れさせ、心のなごむものだった。小鳥達ものんびり遊んでいる。やがて藤の花房が垂れ下がるだろう。もう一度来たい。

四月二十八日

さて、今年の連休に入った。若い人達で街はあふれる。湘南の海は、昔から大勢の人々にもてる。まだまだ、自然が残っているからだ。また、突然いやなニュースが入った。「エアバス墜落炎上、犠牲者九百六十四人」という。着陸に失敗した中華航空機。無残な姿を写す。生存者の中に小さな子供。どうしたことだろう、心が痛むばかりだ。

五月三日

今日は憲法記念日。園もお休みなので、ゆっくり小雨の庭を眺めて、今年も藤波ゆるる五月に会えたとしみじみ思った。また生きて美しい花房を見ることが出来た。さて、期待をよせた細川内閣は八ヵ月で退陣、突然の幕切れに驚いたが、まあ、『殿』には宰相は無理だったなと考えるしかない。少数与党として、羽田内閣が誕生した。一国の政治というものは、むずかしいものだ。

私が生まれたのは松本市本町一丁目で、育ったのは穂高町、この小さな町にも、後藤新平氏が訪れて「普通選挙」の講演があったのを覚えている。私が学校から帰ってみると、町の有力者達が炬燵で、菜っぱ漬けでお茶を飲みながら、政治談義をしていた。信州は寒く、茶の間の炬燵は、いつも父と客で一ぱいになる。政友会だ、憲政会だ、といって長い一日をしゃべっていた。選挙に勝ったといい、負けたといい、どっちにしても家の金はなくなってゆくばかり。政治家の晩節？本当に井戸塀だけが残るのだ。家族の者がたまらない思いで暮らすのを見てきた。大正の頃の話である。今のテレビや新聞で見る世界は変わりつつあるのを思う。

スーダンの飢餓、スーダンを救え、体力尽きて倒れている子供。ハゲタカがそれをじっと見ている。何とやりきれない思いだろう。この写真を見て、どうしてあげたらいいやら、何もしてあげられない悲しさ。その時私は教育テレビで、文楽の「菅原伝授手習鑑」寺子屋の段を見て、父松王丸、母千代の悲しみに共に泣いて見ていたが、そんな切なさどころではない。ああ、いやなものを見てしまった。

羽田内閣少数与党で発足した。また新聞で、ＮＧＯ・国際機関・自治体・非政府組

織など多様な活動に参加するということを知る。なんとなく嬉しいのは、マンデラさんのＡＮＣ議長勝利宣言、南アフリカ共和国初の全人種の参加投票とある。人種の融和、アフリカ白人統治終幕。黒人開放運動、これだから新聞もテレビも見ないではいられない。水野法相（第二次大戦での南京虐殺は誇張だという発言をして問題になった）は辞めるという。社説は更新劇に見る政権の危うさを書いている。

五月八日

「母の日」を祝ってくれた子供に「老の日」はどうでもいいよと言っておく。まだ世間を見続けたいから。

五月三十日

細川さん狙撃される。

久し振りに「語る会」の総会に出て、会の方々と話せて嬉しかった。この会もよく続いたものだとしみじみ思って、始めからのなつかしい方達と語り合った。戦前からこの土地にお世話になり、都会から鵠沼へ移り住んだ人達と、苦労を共にした日は遠く、この頃の味気なさはどうだろう。ここは半農半漁の暖かい町だったがなあ。あの頃隣家の酒屋さん、お菓子屋さん、魚屋さん、植木屋さんなど、近所は親戚以上に頼りにしたものだ。そんな話のできる人は、みんな遠くへ旅立つて、語る会がいまの私には、ただひとっのより処となった。足が悪いので、一年に二回位いしか出られず、街で会の人に出会うこともできなくなった。

鵠生園のデイサービスを受けて今年で六年たった。さまざまな老いを見て、私なりに、真の人間性を学ぶことか出来て心安らかになった。エライ学者さん、絵かきさんやエライ研究者の方々と、不自由な身体で語り合えたことだ。最近亡くなられた林さんは、研究所を近くに持っておられた。お屋敷の中にある。私はこの方で「アルツハイマー」という病気を知った。不思議さを知った。私に向かって話したいということを、せいいっぱい不自由な口で、表情で言う。ある日車椅子の上で、右手で左足を打っている。何か言いたい表情で。ああ、解かった。謡曲「羽衣」の「はやし」の入る所である。私は大きな声でかけ声を入れた。「ハアーオー、イャアー」と打つて見せた。その通り右手で左足で拍子をとった。リズムはちゃんと合っている。この惜しい方は亡くなった。奥様はよくなさつた。日本女性の鑑だ。

さて、私は人様の老にばっかり気を向けて、自分の老に気付かなかった。園のお琴教室のあった日、小さな頃から習った「六段」の曲がどうしても弾けない。自分ながら変な気がして、家に帰って思い出してみた。やっと思い出した。調子が間違っていたのだ。「平調子」これはお琴の基本となる調子をすっかり忘れてしまっていた。

先生に誠にお恥ずかしいことでしたと謝った。日本の習いごとは礼に始まり、礼に終わる。このことは、祖母の溺愛のなかで、たった一つ教えられたものだった。私の家の近くに「宝生流」の家元、宝生九郎氏の別宅があり、そこの横井さんという家の孫と私の孫は赤ちゃんの頃から仲良しだった。昔となったその頃の鵠沼の住人は、有名人ばかり。土地の人はみな親切で、わすれられないものばかり。代がわりとなっては仕方ないことだ。

戦争を知らない若い人が多くなった。戦後五十年年、無理もないことだ。鵠沼は鵠沼なりの戦前戦後の苦労や悲しみがあった筈。それを知っている人達は高齢者ばかりだ。これを私は次の世代の人に伝えておきたい。ものが言えるうちに、書けるうちにと思う。いまは自由にものが言える時代となった。

八月三日

今日も朝から猛暑、家の前の石黒さんがお元気で、鵠生園からのお迎え車に私と乗り、ご機嫌よく九十才の夏を過ごされているようだ。片瀬山から江ノ島へそれから園に着くころ、どこも若者があふれて海は楽しんでいる。猛暑は町の人も嫌っては居れない。今年は去年より稼げれるから。　園に着いたら、まず園の太郎ちゃん（園の飼い犬）がいて、みんなを愛嬌よく迎えてくれる。今日は珍しく若い女性がいて美しい。「太郎ちゃん」は、その美しい女性にぴったりとくつついて離れない。「太郎ちゃんそりゃナイでしょう。私達もお菓子をあげたじゃないの」と、ばあさん連は面白くない。まあ仕方がないよねぇ。太郎もオスだからね、と笑ってしまった。

その若い女性は園へ今日一日来た研修生で、日本女子大学人間社会学、社会福祉科の三年生、小川京子さんという。その教室には約百三十人が学んでいるとのこと。有り難い学部だと思う。若い人が関心を持ってくださるということは、何よりもよいことだ。老後が安心になる。がんばって楽しく生きて行ける。ボランティヤの活動も、考えることより、先ずやってみることが大切だと話した。

八月四日

今朝の新聞の社説を読んで、かなしかった。「南アのカメラマンの死を悼む」南アフリカのカメラマンは「ピユーリッア賞」をとったとのことが、心の痛みを感じたのか。カメラマン・ケビンカーターさんは亡くなった。ほんとうに何と言ってよいか解らない。飢えた少女の後に、大きなハゲワシが少女の死を待って見ている。その少女をなぜ助けてハゲワシを追い払わなかったのか、写真を撮ったことはみんなに可愛そ

うな国のことを知らせてくれて、決してわるいことではなかった筈だ。が余りにもその少女の痛ましさ、只悲しいだけである。私達老人は若い人に気を使っているが、なにもして上げられないのを淋しく思う。

先月二十八日に本当に悪夢のような、全く信じられないことが藤沢の姉妹都市松本に起こった。古い城下町、静かな住宅街で一夜のうちに毒ガスが出て、死者七人、五十八人が入院という恐ろしい事件だった。何でこんなことが起きたのか、まだ解らない。一ヵ月以上も経つというのに。新しい知識は、人を幸せにするための学ではないか。明日は八月六日、原爆忌、みな忘れられない日、どうか世界はみな平和を保っていってほしいものだ。心の安らぎ、憩い、せめて励まして上げたい。

八月十五日

終戦記念日。この日は一番切つない、つらい日である。時は過ぎ四十九年経つた。みなそれぞれ一番大切な人を失ったのだ。私も大切な肉親、弟を失った。まだ、南の島あたりで生きていると、いつも忘れたことはない。私の胸の中にある涙の壺は溢れて止まない。

私の母は、旧家の嫁という立場で、人に言えぬ苦労を重ねたという。弟を生み、弱々しい赤児を残して死んでいった。弟は生まれた日から、生母を亡くし、里子に出され、その里親は、お金だけ受取り、自分の子供にばかり乳をやり、預けた赤ん坊は痩せて、ひいひい泣いてばかりいると、里親の近所の人が知らせてくれた。さあ、それを聞いた父は、その夜雪道を二里歩いて、赤ん坊を取り戻して来て、それからは父は一切家の仕事はせず、ミルクを温め、男手で「むつき」を替え、夜は共に寝て、とにかく育てあげたのだ。父は城下町本町一丁目で昔から「よろず屋」という商家の長男として、何不自由なく祖父母に甘えて育てられ、当時金回りもよかったのだろう、遊芸にこり花柳界でもてたという。赤ん坊（弟）を連れ戻した日からまるで変わって、親戚の者達は、あの道楽者が、とあきれられたとのこと。

このすさまじい父性愛で大きくなった弟は、昭和十九年七月一日、金沢市大手町東部五十四連隊に召され、征ったまゝ還えって来ないのに、まだ私は待つている。戦争の無残さ、決して戦争はしてはならない。これだけは伝えておく。

私も年を重ねた。書ける日まで自分なりに見てきたことを書いて置きたいと願う。国にもそれぞれに言い分はあるだろうが、何も知らない人々を不幸にしてはならない。また、何があろうと、愛国心を持たない国民はいない筈である。

この夏の暑さは猛暑という。私達老人には、果てし無くつらい毎日だった。どこへ行ってもクーラーがあり、骨をさす。防災の日と共に、元慰安婦の問題等、やり切れ

ない辛さを新聞・テレビで知る。

この暑さに打ち水をしても、花も葉も枯れたが、いつしか秋は少しづつ近くなり、夜、庭で鈴虫やこおろぎが鳴く音を聞く。あゝ、今年の夏をしのげて良かったと、話し合った園の人の中で、遠くに旅立った人が、いまどこで、この鈴虫を聴かれることだろう。

九月十五日

敬老の日、百才以上の人、五千五百九十三人という。新しい日本の社会、現実を見られて幸せとも思うが、実感は言えない。今日の繁栄の礎を築いたなんて思い上がりはないが、みな、苦労したなぁとしみじみ語る。

九月十七日

本鵠沼に住む長谷川襄二さんから電話があった。「明日鵠生園へ兄を連れていきますから、会って下さい」とのこと。兄とは長谷川文一さんのことで、永い付き合いの家なので、何がありましたのかと、行って待っていたら、襄二さんと車椅子の文一さんに会った。私の顔を見たら文一さんは「よしきちゃんのおばさんだ」とはっきり言えた。私はびっくりして仕舞った。文一さんとはお母さんの葬儀の日から二十年以上も会わなかった。文一さんは小さな時から小児脳性マヒで、言葉も手足も不自由な人だった。「この子をおいて先には死ねない」といつも口癖のように、お母さんは言っておられた。文一さんは七十一才になっていた。家族の方の苦労、ことに襄二さんのお嫁さんの御苦労には頭がさがるのみだった。お嫁さんは東京の人、襄二さんの人がらの良さにひかれて、大家族の中に来てくださった。三十五年して初めて鵠生園で見て、あの美しい人がすっかりやっれていた。私はいつも有り難いことだと語っていたが、何もしてあげられずに老いてしまった。その私を文一さんは覚えていてくれて「おばさん」と言った。みなびっくりして仕舞った。口がきけたのだ。

もうだめと言うことはないのだなぁと実感した。介護者の方、声を掛けて励まし合ってほしい。ご苦労でしょうが、みんな大切に、思いやりを持って生きて行きたい。平成六年もあと僅かになった。来月は文化祭をしょう。一生懸命に不自由な手で作品を作るのだと張り切っている。

十月

毎日、暑い暑いと言っていた日は、いつの間に立秋となり、公民館祭り、文化祭と

まずまずせい一杯にできた。来年はもっと考えてやろうよと言って、会員は張り切った。

十一月

霜月となる。園に初めてアニメによる、紫式部の「源氏物語」を見せてもらった。ナレーターは職員さん、とても上手だった。アニメは私は初めて見て、その美しさに感心してしまった。人間では及ばないなあと、その動きの優美さ、色の美しさをどうして作り出したのだろう、科学なのか。

この園のデイサービス六年のあいだ　に色々の老いの姿を見てきた。私自身も老いてゆくが、知らなかった世界が又新しく映る。世間は色々と事件が起きる。どうか平和に助けあつてゆきたいと願い、また平成七年を新しい目で見てゆきたい。

おわり

## 湘南の海・相模湾の大気汚染

吉田　興一

単調な砂浜の続く湘南の海岸から眺める相模湾は、打ち寄せる波も静かである。白波が崩れては打ち寄せる海岸線は、箱根双子山の霞む小田原あたりまでゆるやかな曲線で繋がり、その女性的な海原を救うものは、ポッカリ浮かぶ江ノ島である。その緑濃い島は、遙か西に聳える霊峰富士に対比され、古来景勝地の誉れが高い。今でこそ無粋な灯台がその中央に立ち、遊覧地化してしまつたが、かつては情緒豊かな島影が穏やかな相模の海を舞台にして、江戸時代には初代広重の浮世絵の画材になり、人々の賞賛を浴び、庶民の弁財天信仰の流行が幸いし、江ノ島参りと称し、北の阿父利神社の大山参りとともに、大山道、江ノ島道が今に道標を残している。

玄界灘に浮かぶ宗像大社の三女神を祀る江ノ島神社は、かつては相模の海の沖にでて漁労しては生活していた海人の守護神として崇められたのであろう。四面海に囲まれている日本列島には、宗像大社の流れをくむ神社（宗像社）は数多くあるようだが、厳島神社と江ノ島神社が代表クラスで有名である。ここでちょっと江ノ島神社の解説をすると、ご祭神は奥津の宮は多紀里毘売命（たぎりひめのみこと）、中津の宮は市寸島比売命（いちきしまひめのみこと）、辺津の宮は田寸津比売命（たぎつひめのみこと）で　ある。この三人の姫が所謂、宗像三女神で、御窟（いわや）は天照皇大神、須佐之男命をまつり、境内社は八坂神社、秋葉稲荷社で、創立は欽明天皇一三年（552）となつている。

それでは、ここで、宗像三女神について、すこしふれてみましょう。この女神は天照大神と素戔嗚尊が天の安河の早瀬でウケヒを行ったときに生まれたのである。古事記によれば、スサノオが出雲国に降り、根之堅洲国に赴くのにあたり、姉のアマテラスに別れを告げるために、高天原に登ります。しかし、スサノオの荒々しいふるまいに、アマテラスは高天原を奪いにきたかと疑って、弓矢で武装して対決する姿勢を示します。スサノオは邪心のないことを証明するためにウケイを行って、玉と剣の物実（ものざね）から子をうむことにします。アマテラスがまずスサノオの十拳剣をもらい受けて三つに折り、さらさらと天之真名井にふりすすいで、噛みに噛んで息を吹き捨てた。その息吹の狭霧に多紀里毘売命、市寸嶋比売命、多岐都比売命の三女神が生まれた。こんどはスサノオが同様にしてアマテラスのみすまるの珠をもらいうけ、正勝吾勝勝速日天之忍穂耳命（まさかつあかつかちはやびあめのおしほみみのみこと）・天之菩比能命（あめのほひのみこと）ほか三神が生まれた。あとで生まれた五神は

アマテラスの子、さきに生まれた三女神はスサノオの子ということになった。スサノオは「潔白は証明された。私は勝った」と勝ち誇った。とあります。

この三女神のよび名について、多紀理毘売命は奥津島比売命とも田心津比売命（多紀里とは天の安河の早瀬を示してしている）とも呼び、市寸嶋比売命は市杵島とも厳島比売とも称し、弁天様に見立てられている。田寸津比売命は多岐都または多岐津比売命のことで、この多岐都（津）は、多紀里と同じく天の安河の早瀬を意味しています。

この三女神はアマテラスの口から出現したけれども、天っ神（高天原系の神）ではなく、スサノオの娘ですから国っ神（地方神）である。しかし、この三女神は神話の上でも特別な神として扱われています。すなわち、記紀の神話で活躍する神々は、出雲の神々を除けば、すべて大和および河内を中心とした畿内と伊勢、この三っに限られている。その唯一の例外はこの宗像の女神たちで、九州の土地神であるのに、ほかの大和王権の神々に混じり、同列に扱われているのである。

さて、神話のことはここまでとして切り上げましょう。この美しい景観の相模湾の上空をみはるかすと、遙か沖の伊豆の大島も含めて洋上一帯にかけて、薄いグレイの幕が垂れ下がっている。東の三浦半島の空を見ても、西の箱根から丹沢山塊にかけても、例外でなく空は濁っている。霊峰富士も輪郭が美しく眺められるのは、空気の澄んだ冬に限る。それも何時行っても眺められるわけではない。よほど気象条件がよくないと姿を現さない。北方の横浜・東京方面を望むと、一段と濃いガスの幕が垂れ下がり、背筋が寒くなる。数年前、大気汚染は大島はもとより伊豆の島々にまで達していると、確か新聞で読んだ記憶がある。そのときはまさかと思い、疑いの目で見ていた。この湘南を含め、美しい相模の海。空気の清浄な海浜と信じ込んでいた鵠沼の海岸。忌まわしい記事を読んだものと思った。しかし、鵠沼・辻堂・茅ヶ崎と海岸伝いに、頻繁に散歩するに及んで、だんだんと汚染が事実らしいと思うようになった。今ではこの悲しむべき事実に気持が落ち込んでいる。

最近の朝刊でＣＯ2 とか窒素酸化物などの自動車の排気ガス、脱硫装置とか防塵装置とかで大気清浄化の努力している京浜工業地域すら、それらの放出する廃棄ガスのため ――― 日本に限らずアジア諸国の経済向上に伴い、化石燃料といわれる石炭火力が全盛の中国の工業地帯などの例を挙げるまでもなく ――― 地球温暖化が進んでいるとのこと。また東京の恵比寿では市民主導で大気汚染度の測定施設を作り、国は一年ちかくかかって測定値を発表するので、都民の環境改善には手遅れになるからとしている。とくにトラックの排気ガスの窒素酸化物が、総量として、呼吸器障害に顕

著な被害を与えている。昔は海水浴場は、大磯とか、鵠沼とか喧伝されたことがあった。いまは時代の経過により、沖縄やガム島やら南海のリゾート地にしか、美しい空は残っていない。日本全国を探せば、どこも港があれば、後背地には工業施設が大きく拡がり、コンクリートの宅地造成地が大規模に付随している。日本海側とかの辺鄙な海にしか清浄な澄んだ空はなくなってしまったのだろうか。金儲け、拝金主義の波がおしよせ、人命の尊厳思想などをけ散らして、日本全土をわがもの顔で横行している。ふと、私は打ち寄せる白波をみっめながらそう思った。

昔に話を戻して懐古趣味といわれるかもしれないが、今から半世紀ほど前、鵠沼から片瀬までは、今の国道１３４号線ができるまえの通称「遊歩道路」が一本長々と続いていた。砂地の上に舗装された坦々として滑らかな道であった。現在の湘南ホテルの手前あたりが高くなって、松の繁った大きな庭が塀に囲まれて二階家が一棟聳えていた。あたりには家がなく、まさに聳えているといった感じであった。その傍らの緩い坂を通り越して右方向に行けば桟橋に到達する。私にはその頃が、別荘地鵠沼にふさわしいというか別荘地鵠沼海岸の原風景であると思っている。

すでに半世紀を経た現在の状況は前述のとおりだが、あと５０年の後２０４０年の湘南はどのような風貌をそなえたものになるだろうか。環境基準は当然今より厳しくなるだろう。例えば大気汚染を防ぐ規制ができるだろうし、市民はなぜそうしなくてはいけないのかを、誰でも納得できる知識水準に達しているだろう。したがつて、大気の汚染は減り、水質の浄化が実現して、自然環境ははるかに良くなっている。ダイオキシンとか、あるいはフロンに起因するオゾンの破壊で、有害紫外線が地球に降り注ぎ、人体に皮膚ガンなどの不安をもたらすことのないように、大気圏の清浄化が科学の進歩で達成されている。原子力によるエネルギー発生が核融合に転換され、人工の太陽による無限のエネルギーを人類は手にしている。その結果、民族、宗教その他抗争に明け暮れる状況が終息し、子供の餓死等が多発する悲惨な状況が見られなくなる。地球の人口爆発がさらに増大の危機に見舞われ、どこかてエイズとか野蛮な殺し合いで大量の罪なき人々が死ぬことで人口調整が行われるような事態は回避されている。そしてこの湘南も「緑りと太陽の街」という藤沢市のキャツチフレーズが、見事に、先見の明ありと讃えられる。・・・・夢ではなくそう願いたいものである。

文末ではあるが、とくに印象に深かったことは、１９９５年の正月２日に、海岸を散歩したとき、意外にも東京・横浜方面の空は、江ノ島をのぞむ相模灘や、伊豆の大島の稜線がくっきりと美しかったのにひけをとらずに澄み渡っていた。これは排気ガスが普段はいかに多いかを示し、正月三ケ日は極めて少ないという事実を雄弁に物語

っている。その他の日々には、昔の澄んだ空は永久に訣別してしまったのだろうか。宗像三女神が海人の守護神であるならば、地球の環境を救う守護神はどこにおわすのだろうか。神頼みは神話の世界のことで、現代の人類を救うものは、人類の英知にしか頼れないのだと思った。

なお、旧蠟１２月１日の日経の社説で、中国では、酸性雨のことを「空中鬼」と呼んでいるとか。これは経済現代化の急速な発展に伴って、酸性雨が各地で観測され、とりわけ重慶、貴陽、広州とかの西南部が深刻だということである。この酸性雨は硫硫分の多い石炭の消費が原因で、周辺国・地域に越境汚染の疑いも持たれている。と述べてあった。

付記

平成７年１月１７日の早朝、震度７という激震が起こり、淡路島と神戸市の三の宮付近の地殻断層が原因になり、阪神地区に壊滅的な被害を与えた。死者４９００余人、行方不明約２００人、負傷者２５４９２人にのぼり、建物の損壊５０６１４棟、被災者は約３１万人という大災害であった。大正１２年の関東大震災以来の都市型地震が地震はないものと思われた近畿地方を襲ったのである。連日その模様がテレビその他あらゆる通信機器を通じて、全国は無論、全世界に報道された。遺族及び罹災の皆様には心からお見舞い申し上げる。本文中で、２０４０年代の予測を書いたが、一寸先は、人間の能力を超える、予測外の事態が起こるわけで、心情的には理解できてもまるで見当違いになるのがこの世のならいである。不意に不可抗力的に起こる自然の猛威も、人為的な災害も・・・・民族的抗争、宗教的争い、政治的地域騒乱、地球温暖化、緑の破壊と砂漠化、人口爆発などなど・・・それが信条によるか、欲望によるかにかかわらず、人間社会に甚大な破壊を与える。最近もロシヤとチェチェン共和国の戦争も、武器を手にする交戦派と、人権派のロシヤ内部の政治的対立に発展しつつあるという。５０年後はまたたく間で、あさはかな頭脳で予測しても、無力感が先に立つて、ただ希望というか願いというか、夢というには、まことに頼り無い。

おわり

「鵠沼」第７１号
平成７年２月１４ 日発行

鵠生園日記（続）
平成 6年1 ～10月
湘南の海・相模湾の大気汚染

ご注意：本紙（機関紙）の文章を引用される方は、必ず出典を明記して下さい。

編集・発行　　鵠沼を語る会

鵠　沼　公　民　館
電話 33-2001
藤沢市鵠沼海岸 2-10-34